



目次

- 1 第19回 World Youth Meeting 開催報告
- 3 身近に行われている学内外での異文化交流
- 4 さまざまなフィールドでのアクティブラーニング活動
 - ・「高山市での人との出会いとイベント開催」
 - ・「バックパッカーとして笑顔の国で2週間の調査」
 - ・「長野県宮田村におけるまちなか活性化調査」
 - ・「チャンスを引き寄せる（フィリピン・インド）」
- 7 先輩の進路紹介（広告業、地方公務員）
- 8 学部の後期予定



第19回 World Youth Meeting 開催報告

日本福祉大学客員教授 影戸 誠

今年度で19回目を迎える World Youth Meeting を日本福祉大学東海キャンパスで開催した。福井、兵庫、大阪、奈良、京都、埼玉や愛知県内の各地から18校、海外から26校の大学や高校の参加があった。

ICTを活用し、英語でコミュニケーションを取りながら、日本、台湾、カンボジア、インドネシア、マレーシア、韓国、フィリピンからの高校生や大学生が大会テーマの「My Identity as a Member of the International Community（国際社会と私）」に基づいてプレゼンテーションを作成し、グローバル社会で通用する発信力を磨いた。また、複数の国で構成されたプレゼンテーションチームで一つのものを作り上げる協働作業を通じて、学生は多文化社会のグローバル人材として重要となる conflict resolution（異なった意見を乗り越える）力を身につけた。



海外参加者の児玉善郎学長表敬訪問

国内外の方との協働作業を通じて学部生に求められていること

1. いくつかの「違い」に気づき、受け入れること。
2. お互いを尊重しながら、作品完成まで粘り強く取り組み、成果を共に喜ぶこと。
3. 活動を振り返り、新しい体験智（Active Knowledge）を生活の中で生かせること。
4. 必要な情報を段階に応じて収集し、まとめ、英語で共有できること。
5. 写真などの直観的な情報を SNS やインターネットで活用できること。

国境を越えた学生同士の新たなつながり

国際福祉開発学部 2年 川瀬 麻鈴 (岐阜県立大垣南高等学校)

私はこの World Youth Meeting の期間中、さまざまな思いを抱えていた。また、それ以上に、統括係、プレゼンテーション係、広報係の三つのチームの一員として、多くのプレッシャーを抱いていた。私はこの仕事に向いていないと何度も何度も考えることがあったが、プレゼンテーションチームの誰もが自分のプレゼンテーションに全力をかけていたことで、何よりも

World Youth Meeting を成功させたいという思いがあった。そして、統括係として、この World Youth Meeting が全参加者にとって国境を越えた学生同士の新たなつながりを持つ機会になるように取り組み、私自身もこの短期間に様々な国の学生と関わり、良い刺激をもらった。

What I have learnt from WYM 2017

カンボジア工科大学 電子工学専攻 3年 SONG Vergenylundy

Having prepared the presentation under the theme of "My Identity as a Member of an International Community", I realized how important we are as youth to help cooperate and solve the current situation to a better level. Also, I have learnt how to work with my Japanese friends for a fruitful achievement. More than that, I have learned how to adapt and respect new things, especially each

participant's culture in the World Youth Meeting. No matter where we were born, everybody has a role to help solve existent problems. We cannot wait for others to help and should start doing first no matter how little our act. Additionally, we should learn how to respect each other no matter who they are, where they are from. "Root locally, and respect globally"



会場を埋める 500 名の参加者



アクティブラーニングセッション



日本福祉大学付属高等学校の発表

身近に行われている学内外での異文化交流

ノーステキサス大学学生と交流して

国際福祉開発学部1年 福山 智子（鳥取県立倉吉西高等学校）

今回スーパーグローバルクラス（以下SGC）の活動の一環としてノーステキサス大学の学生と交流を行いました。私は今回彼らが読めるように食堂のメニューを英語に翻訳する作業を担当しました。メニューの翻訳という一見単純なことでも日本語のわからないアメリカの学生に伝わるようにする、というのはとても難しかったですが、相手と同じ視点で物事を考えることの大切さを感じることができました。そして、翻訳する際に学んだことは2月に行われる国際フィールドワークできっと役に立つと思うので、やっ

てよかったと感じています。きっとこれは一緒に交流した他のSGCのメンバーも同じだと思います。

しかし同時に今回の交流で私は自分の未熟さがひしひしと感じられました。自分の英語に自信をもってコミュニケーションをとれるように努力を怠ることの無いようにしていきたいです。



美浜町小中学生の英会話ボランティアに参加して

国際福祉開発学部3年 平安名 未里（日本福祉大学附属高等学校）

美浜町では草の根国際交流事業の一環として、小中学生をシンガポールに派遣しています。その事前学習として、児童・生徒の英会話学習を支援する活動が7月に3日間行われました。私は小学生のグループを担当して、自己紹介や身近な話題について英語で話す練習をしました。英会話の指導をしている時に学んだことは、英語のスキルはもちろん必要ですが、私自身が英語を使うのを楽しむことが一番大切だということです。自分が楽しむことで、最初は緊張していた子ども達も徐々に笑顔が増えてきて、積極的に参加してくれるようになり、とても嬉しく思いました。このような交流をぜひ続けていきたいと思っています。



さまざまなフィールドでのアクティブラーニング活動

高山市での人との出会いとイベント開催

国際福祉開発学部 3年 町野 紗希衣 (岐阜県立中津高等学校)

私は、3年生の4・5月に設けられたアクティブラーニング期間を利用して、岐阜県高山市で1か月半のフィールドワークを行いました。高山市の「NPO法人まちづくりスポット（以下、まちスポ）」が受け入れ先となり、まちスポを拠点に、まちスポのスタッフはどのような仕事をしているのか、スタッフとともに行動しながら、まちスポの利用会員の人たちにヒアリング調査を行いました。

まちスポは、「NPOを支えるNPO」（すなわち、中間支援組織）であり、地域の人たち・企業などと「つなぐ」役割を果たしているNPO法人です。ヒアリング調査では、まちスポは地域の人たちにどのように思われているのか、地域とどのようなつながりがあるのかについて、様々な話を伺いました。当初は、高山の地域性や知り合いが増えていくことに嬉しさを感じていたのですが、話している中で、自分にとってあまり関心はなかった「防災」や「捨て猫」の話などを聞いていると、自分の中に様々な感情や疑問がわき、頭が混乱することが多く、時には、新しく人と出会うことにわずらわしさを感じることもありました。最終的には、23件のヒアリング調査を行うことができました。調査の結果、まちスポは、単なる場所（スペース）としての利用が多く、スタッフをうまく活用していないことが分かってきました。そこから、利用会員の何か「やりたい」という気持ちや行動を、まちスポがうまくサポートしていく必要があることを感じました。

1か月半が終わる最終日には、自分の学びを伝えるために、利用会員や滞在中に仲良くなった人たち、さらには、まちスポの理事などを前に報告会を行いました。報告の中では、まちスポに対して、今後の取り組みの提案



まちスポ飛騨高山

を行い、また、地域の人たちに対しては、まちスポの利用の仕方を改めて紹介し、新たな活用方法を提案しました。

さらに、1か月半も高山に滞在している間に、フィールドワークを行うだけでももったいないと思い、他の企業でインターンをしている他大学の学生を巻き込んで、「利き酒」のイベントを開催しました。地酒が有名な飛騨高山ですが、若者の日本酒離れが進んでいることを聞き、まちスポを知らなかった層に対して知る機会を作ること、そして、大学のない高山で大学生が地域の人たちと交流する機会を作ることなどを目的に、実施しました。実際に、反響が大きく、内容も濃いものになり大成功でした。

高山での体験や学びを踏まえて、今後は自分の持っている能力を最大限に活用し、また、伸ばしながら、私の大好きな言葉である「inspire」する、「inspire」されることを大切にさらに経験を積んでいきたいと思っています。人との出会いは私の世界を大きく広げてくれます。そんな出会いを今後も大切にしていきたいと思っています。



まちスポ利用団体交流会



「利き酒」イベント酒ナイト

バックパッカーとして笑顔の国で2週間の調査

国際福祉開発学部3年 堀 稚菜 (岐阜県立羽島北高等学校)

私は今年度から学部新たに受け入れられた、海外研修などを推奨する“アクティブラーニング期間”を利用し同じ学部の友達と2人でタイにフィールドワークに行きました。タイでのフィールドワークの目的はバックパッカーとして2週間タイの首都バンコクを巡りスラム街と首都バンコクとの格差そして生活状態や環境問題、また経済状況を調査することでした。その中でも私が特に興味を持っていたのは衛生問題と環境問題でした。私とその分野に興味を持ったのは1年次に国際福祉開発学部の学生が全員参加する国際フィールドワークIという海外研修がきっかけでした。私は研修先にカンボジアを選択しました。実際に行ってみると、道端にたくさんのごみが捨てられており綺麗とは言い難く日本では見慣れない光景に衝撃を受け、衛生問題や環境問題に興味を持ちました。そして世界15位の観光客数を誇り、ゴミの排出量が多いことでも知られるタイを訪れ、衛生問題や環境問題からその国を知るという新しい視点でのフィールドワークを実施することを決めました。現地では主に首都バンコクの観光地や住宅街を訪れ、その場所ごとにごみ箱の設置の有無や道の衛生状態を調査したり、現地に住む日本人の方にスラム街に同行していただきなかなか見ることができないスラムでの暮らしを見させていただいたりしました。

2週間の滞在で、自らの目でタイを見ることで色々なことが分かりました。まず、1つ目はタイのゴミの排出量が多い原因は屋台が至る所にあり毎日お祭りの出店があるような状態であるということ。しかし、タイの方々の生活には屋台が必要不可欠な存在であり、観光客も屋台を目的として訪れるためタイには屋台がなくてはならない存在であるということです。そして、知識や経験がなくても始められるビジネスであることも影響しタイの失業率が1%を切っているということが分かりました。バンコクの方々の生活と屋台は密接につながっていました。

また、タイは仏教国でありその教えは今でも受け継がれています。生きているうちに良いことをすれば来



世は良い生まれ変わりができるという教えがあるため、日本人なら対応に困ってしまう物乞いにも何の躊躇なくお金を差し出す方や、英語が話せないにも関わらず私たちに一生懸命道案内をしてくださる方など2週間の間にタイの方々の温かさを実感しました。また、スラムに住む方々も兵庫県南部地震が起きた際自分たちの生活よりも日本人のために募金をしてくださったというお話もお聞きし、“微笑みの国タイ”を感じることができました。

このフィールドワークを通してタイが抱えているゴミ問題は屋台が大きく関係しているということやタイの方々の人柄に触れ古くから続く仏教の教えから“微笑みの国”を感じることができ充実した2週間を過ごすことができました。



長野県宮田村におけるまちなか活性化調査

国際福祉開発学部4年 渡部 晶子 (愛知県立桃陵高等学校)

日本福祉大学と友好協力協定を結んでいる長野県宮田村に毎年1~2週間滞在し、街中活性化事業に携わらせていただいています。大学2年次に宮田村役場でインターンシップをさせていただいたことがきっかけで、宮田村での調査や研究を行っています。今回は村の商店街を活性化させるために、県外から来た若者目線、どんな仕掛けが必要か、観光客を呼び寄せるた

めにはどんな工夫が必要かを、フィールドワークを通して考えました。村の地図を見ながら村内外を歩き回り、村民の方々に村の魅力や足りないものなど、行政ではなく学生というポジションだからこそ聞ける皆さんの声を集めました。お母さん、子ども、事業者など様々な立場、年齢の方へのヒアリングを通して、村の景観を活かしつつ皆さんのニーズに沿った提案をする

のはとても難しく、なかなか成果を出すことができませんでした。

私が宮田村で活動をするようになって今年で3年目。普段の大学生活で学んでいる海外のことではなく、国内の課題に対してうまくいかないことが多く、何のために宮田村へ通っているのか分からなくなったり、活動を辞めたいと思ったりすることが何度もありました。しかし、そんな私を毎回笑顔で迎えてくださる役場の皆さんや、「また来てね!」と言ってくださる村民の皆さんのあたたかさにもいつも救われてきました。最近村内を歩いていると村民の方から声をかけていただくことが増え、私の存在や活動の認知度が広まった気がしてとても嬉しかったです。今年からゼミの後



村内散策で見つけた空き家や営業していない商店などを地図に落とし込み

輩と一緒に活動をしてくれるようになり、仲間が増えたことはもちろん、大好きな宮田村に興味を持ってもらえたことが本当に嬉しく、個人的には大きな成果だと感じています。卒業までに引継ぎをすること、もっと多くの学生に宮田村の魅力を伝え知ってもらうことが私のミッションだと思っています。

大学で学んできたことではないから分からない、ではなく、専門の文献を読んだり、いろいろな方の話を聞いたり自分なりに解決できるよう活動してきました。課題解決に向けて常に考え、意見を述べたり行動したりする力をこの活動を通して身につけることができたと思います。卒業まで残り少ない時間ですが、少しでも期待に応えられるよう活動していきたいと思っています。



ヒアリングも人生相談も協力して下さる大好きなマスターがいるお店

チャンスを引き寄せる (フィリピン・インド)

国際福祉開発学部 4年 山本 由梨子 (愛知県立東海南高等学校)

7月19日から9月8日まで、フィリピンに約1か月、インドに2週間滞在しました。フィリピンでは語学研修を、インドでは知人を訪ね、ボランティアにも参加しました。2か国合わせて1か月半という旅の中で、私が常に心掛けていたのは、「チャンスを引き寄せる」ということです。なぜなら、限られた期間中の学びを最大限深めたかったからです。

●語学研修だけで終わらせない!



プレゼンテーションの中で、祭り囃子を披露

フィリピンでは、ミンダナオ国際大学で、20日間の語学研修に参加しました。そこで、既存のプログラムに参加するだけではなく、他の授業にも参加させていただき、自分の地域の祭りについてのプレゼンテーションを実施しました。以前にも、ミンダナオ国際大学を訪問しており、その際に日本の祭りを表現

した出し物の練習風景に感動したので、今度は、私が自分の地域の祭りについて発表したいと思ったからです。英語を使うチャンスを得たかったという理由もあります。それによって、新たな友達ができ、その子たちが色々助けてくれたり、声をかけてくれたりしました。これは、大きな財産だと思います。授業に参加するために、フィリピン人の先生と英語で交渉しました。英語のプレゼンテーションをするという1つの目的のために、学生たちと英語で話す機会、先生に英語で交渉する機会、また、友達を得られたのです。1つのチャンスをつかむことで、一石何鳥にもなりました。

●コミュニケーションを諦めない!

インドのマザーテレサ・ボランティアでは、言葉の壁にぶち当たりました。障害をもつ子どもたちや、施設で働く人たちは、コルカタの現地語であるベンガル語を用いていました。英語が通じず、意思疎通ができず、悔しい思いをしました。そのため、簡単なベンガル語の専門用語や、会話を現地の人に教えてもらい、積極的に話しかけてみました。すると、相手も理解してくれたし、自分も少し理解することができました。



シュシュ・ババンの正面玄関

言葉がわからなくても、話しかけたり、場を共有したりすることで、伝えたい気持ちが相手に伝わり、相手の表情が柔らかくなりました。現地語の重要性を改めて実感し、また、伝えることを諦めなくてよかったと思いました。

●大学生活で築いた人脈に支えられて

フィリピンでも、インドでも、過去の World Youth Meeting 参加者と出会いました。彼らが、私をその国々に繋げてくれたのだと、感謝の気持ちでいっぱいです。

チャンスを引き寄せるために、私が何をしていたかという、とにかく、人とのつながりを大切にしました。誰かと一緒に時間を大切にしたり、初めて会う人ともたくさん話したりしました。そのようにすることによって、人とのつながりが、私をまた新たなつ

ながりに導いてくれるということに気づきました。その中で、言葉が通じ、意思疎通できる喜びを感じました。基本的に、英語を習得しておくことが大切だと思いました。それに加えて、現地の言葉で、あいさつや感謝の言葉を話すことができると、現地の方々の表情が柔らかくなり、相手から話しかけてくれたり、現地語を教えてくれたりしました。

与えられた時間や条件の中で、どれだけ多くのものをつかみ、学びを深めるか。それは、やはり自分次第だと感じました。チャンスを引き寄せて、自分のものとする。これが一番大切だと思いました。



World Youth Meeting 2015 参加者たちとの再会

先輩の進路紹介

生活の中で必ず目にする広告事業

2017年卒業 岩田 拓也 (愛知県立愛知商業高等学校)

私は卒業後、長田広告株式会社へ就職しました。広告会社と聞くとテレビやラジオなどマスメディアを通じたCMなどを思い浮かべる人も多いかもしれませんが、実は他にも広告媒体は沢山あり、私達は生活の中で必ず目に入っているのです。弊社の取り扱っている広告媒体は道路からドライバーさんに見てもらおう看

板、通称「ロードサイン」をはじめ、市役所など公共施設の待合室で流す動画広告や大型商業施設イオンモール内で見せる動画モニター広告なども扱っています。

同期は総合職15名、専門職3名の合計18名が新卒社員として入社しました。全員がそれぞれ得意な分野



があり、お互いに足りない部分を支えながら切磋琢磨できる仲間たちに恵まれました。また、長田広告では海外進出も行っており、現在ミャンマーとマレーシアに拠点を置き、郵便インフラ整備に貢献できる広告事

業や観光地美化に貢献できるゴミ箱広告事業などを行っています。将来的には私も海外で働くことを夢見ているとがんばっています。

学校教育を支えています！



こんにちは。東海市役所教育委員会学校教育課の高橋康祐と申します。

私の学校教育課は、主に小中学校に関わる仕事をしています。管理グループと指導グループに分かれており、私は、指導グループに

在籍しております。指導グループでは、修学旅行や林間学習の手配、就学児童に関わる仕事や教科用図書の手配などを行っています。さらに東海市では、姉妹都市との交流事業が盛んであり、小中学生親善交流などの事業も行っていきます。

約半年が経ち、さまざまな経験をさせていただいています。中でも、7月に姉妹都市の米沢市との中学生親善交流事業の担当になり、米沢市の中学生を東海市に招き、東海市の歴史や愛知県の産業について、学ぶ事業を行いました。

2017年卒業 高橋 康祐 (愛知県立愛知商業高等学校)

また、仕事以外では在学中から続けているボランティア活動にも積極的に参加し、多くの方々に出会い、多くの学びを得ています。

これからも時間の使い方を大事にし、自分とは違った考えを持つ方々と多く出会うために日々精進していきたいと思っています。



学部の後期予定

- 10月 オープンキャンパス
クリーンキャンパスキャンペーン
Global Lounge ハロウィン企画
国際フィールドワーク I 国内研修開始
2018年度ゼミオリエンテーション
- 11月 3年生就職活動トリガーイベント
学内 TOEIC テスト
2年生アクティブラーニング活動期間開始
- 12月 4年生卒業論文提出期限
学内 TOEIC テスト
- 1月 卒業論文発表会
- 2月 国際フィールドワーク I
インド、フィリピン、マレーシア、カンボジア
- 3月 学位記授与式・卒業記念交流会
在学生オリエンテーション
中部国際空港企業説明会
中部国際空港アルバイトオリエンテーション



発行人：日本福祉大学 国際福祉開発学部
〒477-0031 愛知県東海市大田町川南新田 229
TEL. 0562-39-3811 FAX. 0562-39-3281
編集人：国際福祉開発学部 学部長 吉村 輝彦、教授 米津 明彦
お問い合わせ：kokusai@ml.n-fukushi.ac.jp

国際福祉開発学部 ブログ

フェイスブック

